

山形昭の体育科（第3学年）研究計画

1 本研究の位置付け

体育科学習指導要領の目標には、「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる」と明記され、生涯体育の重要性が述べられている。運動に親しむ資質や能力とは、運動への関心・意欲、仲間とのかかわりなど様々である。中でも私は、運動課題を解決する学習を通して、技能を身に付けるために自ら考えたり工夫したりする力こそが、体育科で求める最も大切な資質や能力であると考えている。なぜなら、自分の運動課題に応じて運動の仕方を考えたり工夫したりする力を備えた子どもは、他の運動課題でも、その経験を活用し、新たな課題を解決していくことができるからである。

その資質や能力を育てようと考え、昨年度は、第2学年の体づくり運動「多様な動きをつくる運動遊び」の領域において研究してきた。動きを身に付けさせるために、自分と友達の体や用具の動かし方を比較させ、「運動課題を解決できる体や用具の動かし方（以下、動きのこつ）」を見いださせる授業実践を積んできた。授業実践からは、動きを身に付けることはできたが、動きのこつを見いだしていたとは言い難い。なぜなら、動きのこつを意識しないで、何度も運動を繰り返す中で動きを身に付けた姿があったからである。動きのこつを見いださずに動きを身に付けたとしても、子どもは、どのように動きを身に付けたのかが分からないため、他の運動課題では動きや技能を身に付けられないこともありうる。動きを身に付けた結果だけでなく、動きを身に付けるまでの過程を理解させることが大切である。

また、動きのこつを見いだすための情報が子どもにとって分かりづらいものになっていた。昨年度実践では、動きのこつになり得る情報となる体や用具の動かし方を記した「動きのカルテ」を提示し、その「動きのカルテ」を基にして運動させることで動きのこつを見いださせようとした。しかし、「動きのカルテ」で示した情報は文字情報であり、それだけでは、子どもにとって動きのこつを見いだすための有効な働き掛けにはならなかった。文字情報である体や用具の動かし方と実際の体や用具の動かし方とを比較したり、関係付けたりするのは難しいことが分かった。

そこで、今年度は、第3学年における「多様な動きをつくる運動」を研究領域とし、昨年度の改善点として、体や用具の動かし方を可視化させるためにタブレット端末を用いる。自分や友達の体や用具の動かし方を可視化させながら、「動きのカルテ」で示された体や用具の動かし方を基に自分の体や用具の動かし方と友達の体や用具の動かし方とを比較させる。こうすることで、動きのこつを見だし、動きを身に付けさせる。このように、運動課題を解決するために、自分や友達の体や用具の動かし方を基にしながらかえたり工夫したりする学習を通して、**動きのこつを見いだし、動きを身に付ける子ども（Cn）**を目指す。

2 主張する働き掛け

体のバランスをとる運動、体を移動する運動、用具を操作する運動、力試しの運動の4つの運動の中から1つの動きを取り上げ、子どもが運動意欲を高めるような、簡単な運動課題を設定し、運動させる。次に、別の1つの動きを取り上げて、簡単な運動課題を設定し、運動させる。最後に、「〇〇しながら△△しよう」「〇〇してから△△しよう」といった、最初にやった動きと次にやった動きの2つの動きを組み合わせた運動課題を設定し、運動させる。簡単な運動課題から始めるため、子どもは、もっと難しい運動課題に挑戦したいと考える。このときの子どもは、繰り返し運動すれば、運動課題を解決する（動きを身に付ける）ことができると考えていて、自分の体や用具の動かし方を意識して運動してはいない（C0）。

働き掛け1

工夫の観点を示し、難易度を上げた運動課題で運動させる。

問いをもたせるための働き掛けである。もっと難しい運動課題に挑戦したいと考えている子どもに、工夫の観点を示し、必要な場や用具、条件を揃える。子どもは、工夫の観点を基に様々な運動課題を設定しながら、運動に取り組む。常に難易度を上げる運動課題を設定させるために、やがて自分だけでは解決できない運動課題に到達する。そして、「工夫の観点を基に変えた新たな運動課題でも、解決したい。解決するには（動きを身に付けるには）どうしたらよいか」と考える。このように、新たな運動課題を設定し、その運動課題を解決したいと意欲を高めている状態を問いをもった姿とする。問いをもった子どもに、次のように働き掛ける。

働き掛け2

どこがよくないのかと問い、「動きのカルテ」を提示する。

動きのこつを見いだすための視点を与え、自分の体や用具の動かし方に着目させるための働き掛けである。「運動課題を解決したい。どうしたらよいか」と考えている子どもに、「どこがよくないのか」と問う。子どもは、「分からない」「ここがよくないのかな」と自分の体や用具の動かし

方に目を向け始めるが、よく分からない。そこで、「動きのカルテ」を提示する。「動きのカルテ」には、「どこをどのように動かしているか」という、体の部位と動きのこつになり得る体や用具の動かし方を視点として示しておく。そして、その視点を運動しながら確かめさせる。その際、自分の体や用具の動かし方を可視化するためにタブレット端末を与え、互いの動きを動画で撮影させる。子どもは、「動きのカルテ」で示された視点を基にタブレット端末で撮影した自分の体や用具の動かし方を確認し、自分の体や用具の動かし方に着目する。

自分の体や用具の動かし方に着目した子どもに、拡大した「動きのカルテ」を提示し、自分の「動きのカルテ」で選んだ体や用具の動かし方と同じところに印を付けさせる。また、「動きのカルテ」に示された視点以外の動かし方をした場合は、付箋にその旨を記入させ、拡大した「動きのカルテ」に貼らせる（以下、「みんなのカルテ」）。

働き掛け3

「みんなのカルテ」を提示し、できない原因を問う。

自分の体や用具の動かし方と友達の体や用具の動かし方との比較により、できない原因を考えさせ、運動の見通しをもたせるための働き掛けである。「体のこの部位や用具をこう動かすと、うまくできるようになるのではないかな。でもそれでよいのかな」と考えている子どもに、「みんなのカルテ（対象）」を提示し、できない原因を問う。子どもは、**比較するすべ**を用いて、「動きのカルテ」に示された自分の体や用具の動かし方と「みんなのカルテ」に示された友達の体や用具の動かし方とを比べる。そして、自分と友達の体や用具の動かし方の相違点に運動課題を解決できない原因があるのではないかと気づき、友達の体や用具の動かし方をまねしてみようとする。

ここでは、仮説をもった状態なので、次の働き掛けで実際に運動させて、仮説を検証させる。

働き掛け4

自分や友達をタブレット端末で撮影させながら、友達の体や用具の動かし方を試させる。

動きのこつを見いだし、動きを身に付けさせるための働き掛けである。「友達の体や用具の動かし方をまねしてみよう」と考えた子どもに、まねしてみようと考えた友達の体や用具の動かし方を実際に運動させ、運動課題を解決するのに適しているかどうかを判断させる。その際、自分や友達の体や用具の動かし方を可視化するためにタブレット端末で撮影させる。試した友達の体や用具の動かし方で、自分の運動課題を解決する子どももいれば、そうでない子どももいる。解決できない子どもには、「みんなのカルテ（対象）」から別の体や用具の動かし方を選んだり、**解決した友達の体や用具の動かし方（対象）**をタブレット端末で撮影したりするように促す。子どもは、「対象から新たな情報を得る→試す」という一連の流れを繰り返す。このときの子どもは、**関係付けるすべ**を用いて、自分の体や用具の動かし方と友達の体や用具の動かし方とを関係付けて考え、動きのこつを見いだし、運動課題を解決する（動きを身に付ける）ことができる。

また、このときの活動をフローチャート図に記させておき、次の働き掛けのときに活用する。

働き掛け5

どうしたらできるようになったのかと問い、「運動課題解決への秘伝書」をつくらせる。

学びをつなぐ力を発揮したことを自覚させるための働き掛けである。動きのこつを見いだし、動きを身に付けた子どもに、「どうしたらできるようになったのか」と問い、フローチャート図を基に、秘伝書をつくらせる。子どもは、**既存の見方（C0）と動きのこつとをつなぎ、目指す姿（Cn）**となる。

3 検証

(1) 検証すること

- ① 構想した働き掛けにより、考えるすべを用いながら、既有事項を基に課題解決に必要な情報を収集・判断することができたか。
- ② 構想した働き掛けにより、学びをつなぐことができたか。

(2) 検証の方法

- ① 働き掛け3および働き掛け4において、比較するすべや関係付けるすべを用いながら、自分の体や用具の動かし方と友達の体や用具の動かし方とをつなぐことができたかを、ワークシートの記述や子どもの様子により判断する。
- ② 働き掛け5において、友達の体や用具の動かし方を基にしながら考えたり工夫したりして、動きのこつを見いだし、動きを身に付けることができたかをワークシートの記述や実際の子ども様子により判断する。

4 年間の授業計画

- (1) 指定研究授業（7月） 「グラグラ配達人（バランスをとりながら移動する動き）」（4時間）
- (2) 中間検討会（9月） 「クルッとキャッチ！新体操（用具を操作し、バランスをとる動き）」（4時間）
- (3) 初等教育研究会（2月） 「基本的な動きを組み合わせる運動（用具を操作しながら移動する動き）」（4時間）